

## 古代史シリーズ5「日本の神社と神々」

### 第二部「伊勢信仰と大国主信仰の神」



本冊子は、筆者が古代史セミナーを実施している中で、講義録を製本化したものです。

当シリーズは「日本の神社と神々」と題し、記紀に係る代表的な神社を捉えます。「熊野大社」「伊勢神宮」、「出雲大社」、「住吉大社」、「宗像大社」、「宇佐大社」、「賀茂大社」、「籠神社」、「眞名井神社」の九つの神社を第一部から第四部に分けて解説します。記紀で述べる神代の世界は実存する神社の神と関係しているはずです。調べていくと記紀には明確には書かれていないが、記紀の神々に関与したと思われる神々が見えてきます。記紀を神社の観点から光を当ててみようという試みです。

第二部は「伊勢信仰と大国主信仰の神」と題して、伊勢神宮を第一・二章、大国主信仰の出雲大社を第三―五章で記述します。

著者：有限会社 情報戦略モデル研究所

井上 正和



はじめに

本冊子は、筆者が古代史セミナーを実施している中で、講義録を製本化したものです。

筆者は、以前「メーカーのS田やコンサルタントが専門でした。十年ほど前から大学での講義をきっかけに古代の文化や歴史に興味が湧き、古代史のテキストを作り講義するようになりました。

元々、素人が古代史セミナーのテキストを作る訳ですから、古事記や日本書紀(以降は「記紀」という)が読めなかつたり、古代史は良く分からないと思われる初心者の方々が持たれる感覚が同様に疑問になりました。

当該古代史セミナーが以外に人気があるのは、素人の視点で不明点を解説することにあるのかもしれない。また、体系化されていて分かり易いとお褒めをいただきますが、元S田としてシステム設計やプロジェクトマネジメントで体系化することが性癖になっていることが寄与しているのかもしれない。

古代史シリーズ5「日本の神社と神々」の第二部「伊勢信仰と大国主(出雲)信仰の神」では、天照大御神を祭祀する神道体系の頂点にある「伊勢神宮」の創建の由来と「お伊勢参り」に代表される伊勢信仰の要因を捉えます。また、葦原中国を支配していた出雲大国は大国主命が高天原へ国譲りをする時に、出雲大社を創建してもらいます。両神社の由来と特徴を解き明かしていきます。

本冊子は、記紀を読み解くために、参考図書を主体的に活用し記紀で裏付けをする形で進みます。図柄はウキペディアからかなり引用しています。活用しました主要参考図書は次の通りです。

- 十「なぜ八幡神社が日本で一番多いのか」 島田裕巳著(幻冬舎)
- 十「日本の神社」伊勢神宮(内宮)「ディアゴステイニ」
- 十「日本の神社」伊勢神宮(下宮)「ディアゴステイニ」
- 十「神宮」S社巡拝案内(伊勢神宮崇敬会)
- 十「元伊勢籠神社御由緒略記」(元伊勢籠神社)
- 十「日本の神社」出雲大社「ディアゴステイニ出版」
- 十「出雲風土記」加藤義成校注(報光社)
- 十「出雲と大和のあけぼの」 斎木 雲州著(大元出版)

十「熊野大神」(加藤隆久著、戎光祥出版)

十一「日本書紀」(宇治谷 孟著、講談社)

十二「古事記」(竹田恒泰著、学研)など

本冊子の古代史シリーズ5「日本の神社と神々」の第二部「伊勢信仰と大国主(出雲)信仰の神」の全体構成は次の目次に上げておきます。

古代史シリーズ5 「神社と神々」

第二部「伊勢信仰と大国主(出雲)信仰の神」の目次

第一章 「伊勢神宮の神と特性」	5
天照大御神の位置づけと伊勢神宮の特性を全体像で掴みます。	
第二章 「伊勢神宮の由来と広がり」	14
伊勢神宮の創建由来とお伊勢様信仰の背景を掴みます。	
第三章 「大社造りと社殿の神々」	25
大社造りと熊野の神と伊勢の神との位置づけを把握します。	
第四章 「出雲の神々と大社創建」	35
書紀を通しての熊野大社の由来、大国主命とその関係神を把握します。	
第五章 「出雲大社の祭祀」	48
出雲大社の祭祀と熊野大社関係を理解します。	
おわりに	59

◆第一章 「伊勢神宮の神と特性」の目次

第一話 伊勢神宮の全体概要……………6

第二話 祭祀構造……………7

第三話 建築様式と社殿配置……………9

コラム…「胎藏界曼荼羅と金剛界曼荼羅」……………12

## 第一話 伊勢神宮の全体概要

八幡、天神、稲荷などの神社名は神の名前であるが、伊勢神宮は神の名前ではなく天皇の祖先である「天照大御神（アマテラスオオミカミ）」を祀る場所を表す名前である。「お伊勢様」で知られる皇室の祖先は「皇祖神」とされ、記紀に登場する神道（しんとう）の中核の神である。

神宮構成は、天照大御神を祀る「内宮（ないぐう）」と豊受大御神（トヨウケオオミカミ）を祀る「外宮（げぐう）」からなる（参照資料1-1）。正式名称はそれぞれ「皇大神宮（こうたいじんぐう）」、「皇大神宮（こうたいじんぐう）」という。伊

勢神宮とは、祭神が坐（まし）ます正宮（しょうぐう）の他に別宮（べつぐう）、摂社（せつしゃ）、末社（まつしゃ）、所管社（しよかんしゃ）からなる。別宮が十四社、摂社が四十三社、末社が二十四社、その衣食住を司る所管社は正宮

所管が三十四社、別宮が八社、正宮正宮にそれらを含めた百二十五社を合わせて伊勢神宮という。

別宮とは、御正宮の「わけみや」という意味で、御正宮について尊いお宮のことをいいます（参照資料1-2）。例えば、伊邪那岐宮、伊邪那美宮などが別宮です。皇大神宮（内宮）に十ヶ所、豊受大神宮（外宮）に四ヶ所の別宮があります。摂社は延喜

参照資料1-1:内宮・外宮配置



出典: ウィキペディアから原図引用



宇治橋からの日の出



内宮（新社殿地と古社殿地）

参照資料1-2:伊勢神宮別宮14社マップ



出典: ウィキペディア

参照資料1-3: 伊勢神宮別宮14社

内:内宮境内、月:月読宮境内、瀧:滝宮境内、別:別場所

No	別宮名	祭神	場所	祭神概説
3	荒祭宮(あらまつりのみや)	天照大御神荒魂	内	天照大御神の荒魂を祀る10別宮で最大の別宮
5	月読宮(つきよみのみや)	月読尊	月	天照大御神の弟神。月の満ち欠けを教え層を司る神
6	月読荒魂宮	月読尊の荒御魂	月	月読尊の荒御魂を祀る
7	伊佐奈岐宮	伊弉諾尊	月	天照大御神の御父神
8	伊佐奈弥宮	伊弉冉尊	月	天照大御神の御母神
—	瀧原宮	天照大御神御魂(和魂)	瀧	皇大神宮の遙宮(とおのみや)と称され最初の宮
—	瀧原竝宮(ならびのみや)	天照大御神御魂(荒魂)	瀧	瀧原宮と二宮並んで奉斎されている
—	伊雑宮(いざわみや)	天照大御神御魂	別	磯部(いそべ)の大神宮さんと呼ばれ、志摩一円の漁業関係者の信仰があつた。特に漁師や海女さんは「磯守(海幸木守)」を受け、身につけて海に入るのが風習となっている。
1 2	風日祈宮(かざひのみのみや)	級長津彦命(しなつひこのみこと)、級長戸辺命(しなとべのみこと)	内	風の神。農作物の成長に風雨の災害のないようお祈りする「風日祈の神事」に由来。元寇暴風となった、伊勢の神風の話が伝えられている
1 3	倭姫宮	倭姫命(やまとひめ)	別	天照大御神の御代代(みつえしろ)となって、皇大神宮ご創建のご功績。
4	多賀宮(たかのみや)	豊受大御神荒御魂	外	豊受大御神の荒御魂。外宮の四別宮のうち、第一位
1 5	土宮	大土乃御祖神(おおつちのみおやのみかみ)	外	古くから山田原やまだのはらの鎮守の神でしたが、外宮の鎮座以後は宮城の地主神、宮川・郷防の守護神
—	月夜見宮(つきよみのみこと)	月夜見尊 月夜見尊荒御魂	別	月読宮のご祭神と同じ。月夜見尊と月夜見尊荒御魂を一つの社殿に合わせてお祀り
1 6	風宮	級長津彦命/級長戸辺命	外	内宮別宮の風日祈宮のご祭神と同じ

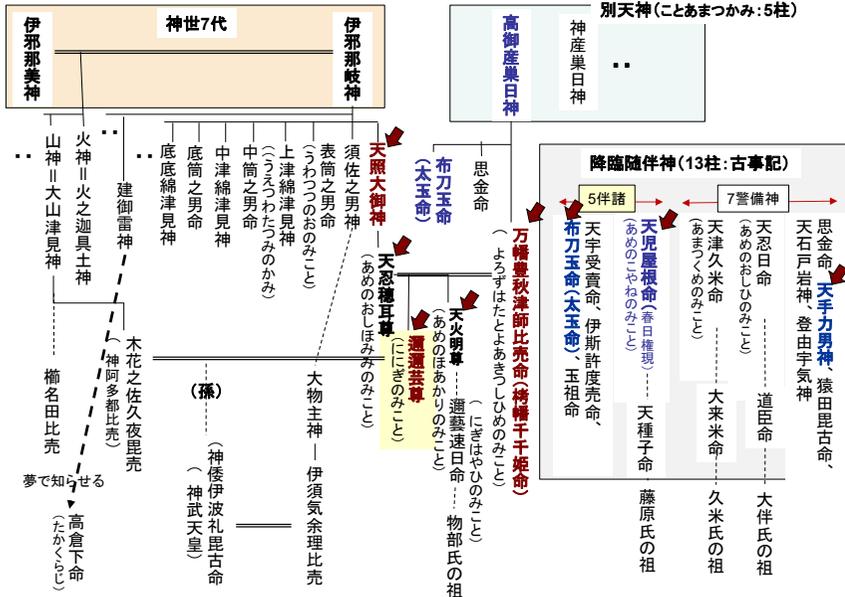
出典:日本の神社「伊勢神宮(内宮、外宮) デアゴスティーニ、

式神名帳(えんぎしきじんみょうちよう)に記述され、末社は本宮の由来を記す延暦儀式帳(えんりやくしきしきらよう)にその由来に関わりが記述されている神社です。所管社は正宮や別宮に直接関わり合いがあり、水や酒、米、塩、絹、麻など衣食住を司る神々が多く祭られています。内・外宮の諸官社の設置場所は、それぞれの境内、月読宮境内、滝宮境内とそれ以外の別場所に別れます。伊勢以外で天照大御神を祀る神社は、神明社、神明宮、皇大神宮などと呼ばれる。代表的な神明社は、芝大神宮、石川の金沢神明宮、長野の仁科神明宮、京都の日向(ひむかい)神明宮(日向大神宮)などがあります。

第二話 祭祀構造

内宮は天照大御神を祭る。神仏習合時には、天照大御神の本地仏は大日如来(金剛界大日如来)とされまし。た。ご神体は八咫鏡(ヤタノカガミ)、相殿(あいどの)同座すること(は天手力男神(マメノタジカラオノカミ)で「神体は「弓」、栲幡千千姫命(タクハタチヂヒメノミコト)の「神体は「剣」である。天手力男神は天の岩戸を引き開けた手のあまりある力の神で、瓊瓊杵尊(ニギギノミコト)の随伴神として天孫降臨する神である。天照大御神の守護神で相殿に鎮座する。栲幡千千姫命の「栲(たく)は、衣を作る際の繊維となり、「幡(はた)は繊維を織る機械のこと」を意味しており、すなわち、「織物の神様」を表してい

参照資料1-4:伊勢神宮(内宮、外宮)正宮の関係神系図



出典: 『海道東征』をゆく(産経新聞社)、「古事記」(竹田恒泰著、学研)

る。衣食住の「衣」を受け持つ神である。天照大御神の子である天之忍穗耳尊(アメノオシホミミノミコト)の后になる神である。栲幡千千姬命は瓊瓊杵尊を生み、天孫降臨へとつながる(参照資料1-7)。

外宮は豊受大御神(トヨウケオオミカミ)を祭る。本地仏は胎藏界(たいざうかい)大日如来とされた。ご神体は「鏡」、相殿は天兒屋根命(アメノコヤネノミコト)、ご神体は「笏(しやく)」、太玉命(ヲトダマノミコト)のご神体は「宝玉(勾玉)」、邇邇芸尊(ニギノミコト)のご神体は「鏡」である。(注)密教曼荼羅に關してはコラムを参照してください。

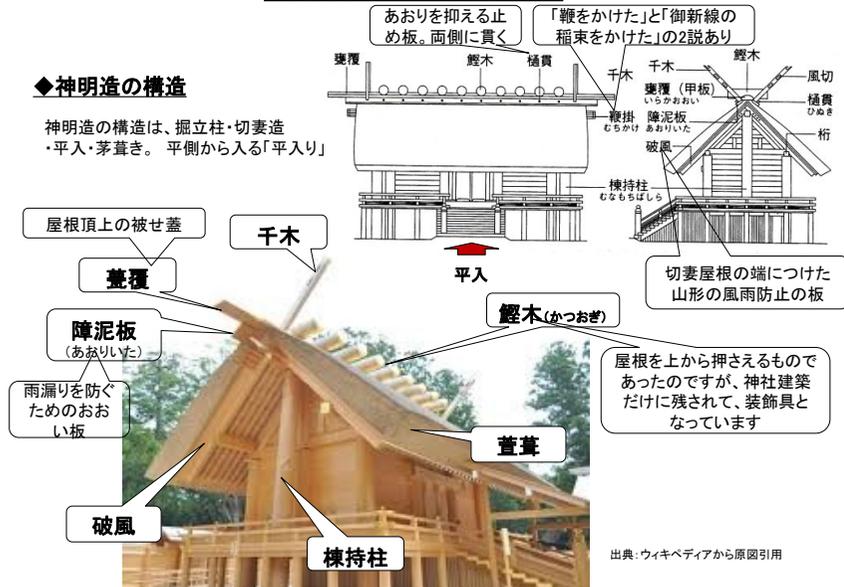
天兒屋根命は天岩戸伝承で祝詞(のりと)を奏上した祝詞の神、太玉命は天岩戸伝承で鏡を天照大御神に捧げた祭祀(さいし)の神、邇邇芸尊は天孫降臨により高千穂の峯に降臨され、孫のイワレビコ尊が神武東征によって初代天皇、神武天皇となる。内宮の中心にある心御柱(しんのみはしら)が内宮・外宮の御正殿で天照大御神のご神体の床の真下に埋められている。由来は、「天皇を象徴するもの、天皇を守護し、天皇に国を守護してもらおう」ということである。又、神籬(ひもろぎ)説もあるが、「御正殿の位置を明確にするもの」というのが有力視されている。

第四十代天武天皇時、齋宮制度(さいぐうせいど)が正式に設けられるが、それまでも齋王(さいおう)は天照大御神の御杖代(みつえしろ)神の意を受ける依り代として奉斎(ほうさい)身(み)を清めて神仏を祀(まつ)ることした。天武天皇が始めた齋宮制度は息女の太来皇女(オオクメノヒメノミコ)から始まる。齋王は内親王や女王といった皇室に連なる女性を選ばれ、潔斎(けつさい)を行いなから神事の奉仕をする。内親王とは嫡出(ちやくしゅつ)の皇女および嫡男系嫡出の皇孫(天皇の子孫)である女子をいう。

## 第三話 建築様式と社殿配置

伊勢神宮の正殿は神明づくりという伊勢神宮独特の建築様式を持つ(参照資料1-5)。屋根の千木(ちぎ)と鯉木(かつおぎ)と萱葺(かやぶき)を特徴とする。神社建築の最初である出雲の大社造りとは構造、土台、心柱、入口がかなり異なる。

### 参照資料1-5: 神明づくり



#### ◆神明造の構造

神明造の構造は、掘立柱・切妻造  
・平入・茅葺き。平側から入る「平入り」

伊勢神宮の正殿は神明づくりという伊勢神宮独特の建築様式を持つ(参照資料1-5)。屋根の千木(ちぎ)と鯉木(かつおぎ)と萱葺(かやぶき)を特徴とする。神社建築の最初である出雲の大社造りとは構造、土台、心柱、入口がかなり異なる。

千木は出雲大社にもあり、それを踏襲している。ちなみに千木を持つ神社は出雲大社、伊勢神宮、住吉大社、春日大社とその系列になる。記紀に掲げる中核の神を持つ神社である。外削ぎの千木を男系神、内削ぎ千木は女性神を祭る社とされる。伊勢神宮をみると、内宮は天照大御神を祭るので内削ぎですが、外宮は豊受大御神で記紀には女性神と書かれていますが、外削ぎで男系神の形式です。何かいわれがあると思われず。

鯉木(かつおぎ)は、もともと屋根を上から押さえるものであったのですが、神社建築だけに残されて、装飾具となっています。千木と鯉木は一体で使用されています。内宮は十本、外宮は九本の鯉木です。ちなみに、大社造りの鯉木は三本です。

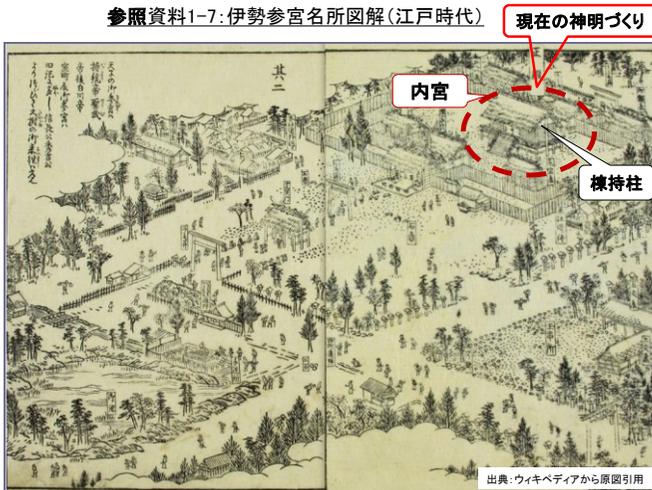
他に社殿の屋根に係る細工に屋根頂上の被せ蓋(かぶせぶた)である葺(いらかおおい)、雨漏りを防ぐための覆い板である障泥板(あおりいた)、切妻屋根の端につけた山形の風雨防止の板で破風(はふ)がある。

神殿への入口は平入である。平入りとは屋根の流れ方向を平と言ひ、平側から建物に入る形式を平入りと言う。すなわち棟(大棟)と平行な面に入入口のある形式である。ちなみに、出雲大社は妻入りである。

参照資料1-6: 伊勢神宮参詣曼荼羅(室町時代)



参照資料1-7: 伊勢参宮名所図解(江戸時代)



内宮、外宮共に社殿配置は基本的に同じであるが、大きな差は、瑞垣(みずがき)内の御正殿と宝殿の配置が逆になることである(参照資料1-8)。(千木も内宮が内削ぎで、外宮が外削ぎである。両宮の祭神は対称形で相对同等の神として位置付けているのは興味深い。

参照資料1-8を  
用いて内宮を中心  
に垣内と社殿配置を  
解説しましょう。

内宮、外宮共に社殿配置は基本的に同じであるが、大きな差は、瑞垣(みずがき)内の御正殿と宝殿の配置が逆になることである(参照資料1-8)。(千木も内宮が内削ぎで、外宮が外削ぎである。両宮の祭神は対称形で相对同等の神として位置付けているのは興味深い。

内宮、外宮共に社殿配置は基本的に同じであるが、大きな差は、瑞垣(みずがき)内の御正殿と宝殿の配置が逆になることである(参照資料1-8)。(千木も内宮が内削ぎで、外宮が外削ぎである。両宮の祭神は対称形で相对同等の神として位置付けているのは興味深い。

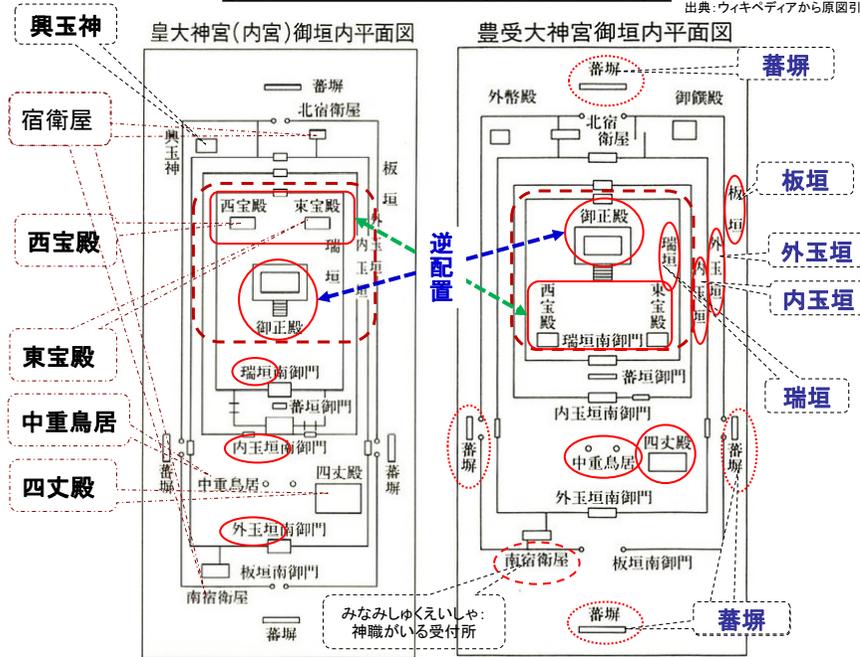
内宮、外宮共に社殿配置は基本的に同じであるが、大きな差は、瑞垣(みずがき)内の御正殿と宝殿の配置が逆になることである(参照資料1-8)。(千木も内宮が内削ぎで、外宮が外削ぎである。両宮の祭神は対称形で相对同等の神として位置付けているのは興味深い。

建築物の支えである棟持柱(むねもちばしら)は掘立柱であり、棟の南北で本殿を支える大黒柱になっている。掘立柱とは直接土に埋め込んだ柱である。大社造でも掘立柱を基本とする。大社造りでは九つの柱があり本殿を支えるが、中央の三本の柱は中央にある心御柱(しんのみはしら)を宇頭柱(うずばしら)が両側からはさみ大黒柱とする。明らかに大社造の方が耐久性が優れている。出雲大社の大社造は第三章の「大國主信仰」で詳述する。

「伊勢両宮曼荼羅」によれば、現在の神明造りの様式は西暦千六百年以降に出来上がったことが分かります。それは、室町時代の伊勢参詣曼荼羅(参照資料1-6)には棟持柱が見えないし、妻入りになっており、大社造に倣っているように見える。江戸時代の伊勢参宮名所図解(図表1-7)には棟持柱が見える。つまり、神明造の建築様式は江戸時代になって作られたことが判明する。次に伊勢神宮の社殿構成を見てみよう。

## 参照資料1-8:伊勢神宮社殿配置

出典:ウィキペディアから原図引用



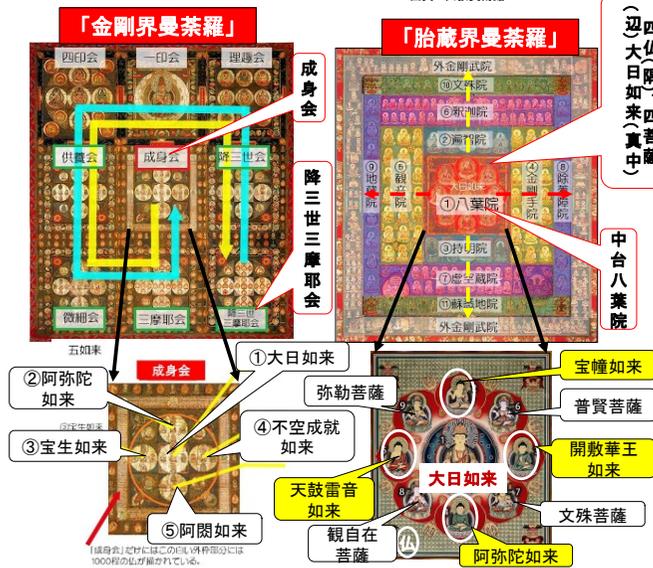
御正殿は四つの垣根で護られている。一番外側から板垣(いたがき)、外玉垣(そとたまがき)、内玉垣、瑞垣(みずがき)である。板垣の内側が垣内神域になる。「不浄除け」として蕃塀(ばんぺい)が東西南北に配置される。この門を入ると神域を囲む外玉垣がある。南北の外玉垣門には宿衛屋(しゆくえいしや)を配置し、神職は参詣者が「参宮章」を持参しているか否かによる入門監視と受付をおこなう。

外玉垣を入ると、内玉垣があり玉垣内になる。玉垣は神様の魂(たましい)がおわします所を意味する。伊勢神宮では中重鳥居(なかのえのとりい)と四丈殿(しじょうでん)がある。神宮の四丈殿は、雨天の時に主に使用される社殿であり、主に「大祓(おおはらえ)」などの行事に使用される。四丈とは、建屋の大きさ(丈)を表しています。一丈とは十尺のことをいいます。

中重鳥居を過ぎ、内玉垣門を入ると瑞垣門(みずがきもん)があり、瑞垣門内が神殿域である。御正殿と東西宝殿がある。西宝殿には、神宮の神職の方が四十年前(前回のその前の遷宮の時)に奉納された「古神宝類」が、大切に保管されている。神宮の東宝殿には神宮での行事である「月次祭」「神嘗祭(にいなめさい)」等で、天皇(皇室)からの勅使から奉納された品々が、保管されている。御正殿には、天照大御神(アマテラスオオミカミ)、相殿神として天手力男神(アメノテカラオノカミ)、万幡豊秋津姫命(ヨロズハタトヨアキツヒメノミコト)を祭る。

参照資料1-9:胎蔵界曼荼羅と金剛界曼荼羅

出典: 仏教美術館



弘法大師・空海は中国唐代の密教の高僧である恵果(けいか)に師事し、真言密教の奥義(おうぎ)を伝授され日本に持ち帰る。そして、空海はその密教の教えを絵解きし曼荼羅に表した。曼荼羅は悟りの境地を絵柄で示したものに  
なっており、代表的なものには大日経を示した「胎蔵界曼荼羅(たいぞうかいまんだら)」と金剛頂経(こんごうちょうぎよう)を示した「金剛界曼荼羅(こんごうかいまんだら)」があります。

「金剛界曼荼羅」は經典の「金剛頂経」を基本に描かれています。これは大日如来の「智慧」を表しています。ここでいう「智慧」とは真理を明らかにし悟りをひらく働きのことを云います。金剛とは、如来が悟った智は堅固で一切の煩惱を打ち砕く程の力があるという意味で「金剛」とつけられています。「金剛界曼荼羅」は、中央の「成身会(じょうじんね)」から始まり右回りに進み最後「降三世三摩耶会」まで展開して見る事ができます。成身会は密教の大日如来の智慧(真理)を分解した仏様の知恵で表したといわれます。大日如来を中心に大日如来・上(西)の阿弥陀如来・下(東)の阿閼(あしゅく)如来、向かって左(南)の宝生(ほうしよう)如来、右(北)の不空成就(ふくうじょうじゆ)如来の四如来が配置されている。

阿弥陀如来さまは万物がもつ各々の個性、特徴を見極め、その個性を活かす知恵の仏、阿閼如来さまは仏教が一切の事象をありのままに分け隔てなく映し出すように、一切をあるがままに受け入れ、分別をしない智慧の仏、宝生如来さまは森羅万象を平等に観る智恵で、万物が大日如来の化身であり、平等の仏性をもつ事を覚る智恵の仏、不空成就如来さまは眼耳鼻舌身の五感を正しく統御し、それらによつて得られる情報をもとに、現実生活を悟りに向かうべく成就させてゆく智恵の仏で

コラム: 「胎蔵界曼荼羅と金剛界曼荼羅」

す。大日如来さまは永遠普遍、自性清浄なる大日如来の絶対智であり、他の四智を統合する智恵である。大日如来の絶対智を加えて五智を五仏で密教の世界を表現した。この心理を明らかにする智慧で人々を救済する方法と悟りへの道を表しています。衆生をお仏様が救済する知恵の順序を表します。

金剛曼荼羅図の右回りの黄色線、これは人々を救済する方法の順序をこの曼荼羅で表現しています。反対に降三世三昧耶会から左回りに回ると(金剛曼荼羅図青色線)これは人々が密教を学ぶ順序を表現していると云われています。大日如来がどのように変身して私たちを救うかを表していることとなります。端を入り口として中央の大日如来に近づいていくイメージです。現実世界を貫いている普遍的な理法です。

「胎藏界曼荼羅」は大日如来がどのように変身(対応)して私たちを救うかを表している。「胎藏界曼荼羅」に描かれている諸尊は、それぞれの存在の意義を發揮しながら、相互供養し、大日如来のこの世の全ての生命を生かす大いなる生命ならびに慈悲や智恵を分担し、衆生を救済し、悟りの世界が得られるよう衆生を導いている働きをさまを表しています。つまり、大日如来の真理を役割分担した四百十四の仏で表した理の世界の象徴である。参照資料①の絵のように十二の「院」に分かれています。これらの院は中心の中台八葉院から上下左右に展開していることを示しています。

例えば、中台八葉院においても、大日如来を囲む四仏、四菩薩はそれぞれの役割に分解されます。

「四仏」を見ると、宝幢如来(仏性に目覚め)↓開敷華王如来(修行)↓阿弥陀如来(悟り)↓天鼓雷音如来(涅槃)となり、仏を手伝う「四菩薩」を見ると、普賢菩薩(菩提心)↓文殊菩薩(知恵)↓観自在菩薩(慈悲)↓弥勒菩薩(未来)というように役割分担をされています。この大日如来の心理を表す中台八葉院は大日如来の智慧を四仏・四菩薩の知恵に分解し、仏様を用いて四方向へ繋げた体系図になっているわけです。衆生にむけて大日如来が変身され、如来の真理を現実世界の普遍的理法に繋いで悟りの道を智の体系として作り上げているのです。

以降省略

## 参考図書

- 十「なぜ八幡神社が日本で一番多いのか」 島田裕巳著(幻冬舎)
- 十「日本の神社 伊勢神宮(内宮)」(ディアゴスティーニ)
- 十「日本の神社 伊勢神宮(下宮)」(ディアゴスティーニ)
- 十「神宮125社巡拝案内」(伊勢神宮崇敬会)
- 十「元伊勢籠神社御由緒略記」(元伊勢籠神社)
- 十「日本の神社 出雲大社」(ディアゴスティーニ出版)
- 十「出雲風土記」 加藤義成校注(報光社)
- 十「出雲と大和のあけぼの」 斎木 雲州著(大元出版)
- 十「熊野大神」(加藤隆久著、戎光祥出版)
- 十「日本書紀」(宇治谷 孟著、講談社)
- 十「古事記」(竹田恒泰著、学研)など

おわりに

日本の古代史を調べる時、最も拠り所となる記紀、すなわち古事記・日本書紀の中心にある神社が伊勢神宮と出雲大社です。神話の造化三神、神代七代の「神代の世界」を経て、天照大御神から始まる「神の世界」が出来上がります。神武東征後の初代神武天皇から始まる「天皇の世界」の前の「神の世界」に「出雲の国譲り」が記述されます。

「国譲り」とは葦原中国を制していた出雲大国に対して、高天原にいた天照大御神を中心とした勢力が出雲から葦原中国の禪定を受ける出来事です。古事記では、この出来事の中心人物は天照大御神の命を受けた建御雷神（タテミカツチノカミ）が出雲の大国主命に禪譲を迫ります。この国譲りは葦原中国が出雲王朝から高天原王朝へ移行したことを意味します。禪定したということは高天原王国の勢力が出雲に対して圧倒的に勝る最新の軍備（鉄剣、鉄鏃など）や体制を有していたものと思われまます。禪定に際し、大国主命の要望をすべて受け入れた神社作りが高天原の総力を挙げたものであるのを見ても、侮れない出雲大国の力を窺い知ることができます。

この時の各王国の首長が高天原の「天照大御神」と出雲の「大国主命」であり、この二柱の神社が「伊勢神宮」と「出雲大社」です。出雲大社は、国譲りの時に大国主命が「我が住処を、皇孫の住処の様に太く深い柱で、千木が空高くまで届く立派な宮を造っていただければ、・・・」の要求が受け入れられ造られたものです。神武天皇が初代天皇として国を開かれたのが紀元前六六〇年ですが、その前に出雲大社は創建されたことになりまます。

一方、伊勢神宮は第十一代・垂仁（スイニン）天皇期に倭比売命（ヤマトヒメノミコト）が、笠縫邑から二十三か所を巡り、伊勢を確定地にするわけですから、大和に纏向遺跡が作られた三世紀とみるのが穏当です。伊勢神宮が出雲大社の後であるということは、この時に神社と言う形態が出現したのであるかと想定されます。

葦原中国から古代大和朝廷までに至る壮大なドラマを受け継いだこの二大神社が記紀に印される「神の世界」からの根幹にあり、日本の神社の原型を作っていたものであることは論を待たないでしょう。

**【著者略歴】 井上正和(いのうえまさかず)**

熊本大学工学部、九州大学大学院工学研究科卒業後、1971年日本IBM(株)入社しSE部門に配属。1992年、中小・中堅企業コンサルティング部門を立ち上げ、責任者としてコンサルティングプロシージャの普及を図る。

2001年に独立し、有限会社 情報戦略モデル研究所を設立。

経営戦略やIT戦略の策定や構築に係る書籍出版、研修とコーチング支援、業務プロセス改善・改革に係る研修とコーチング支援などを多数手掛ける。2011年4月 神奈川工科大学で「情報と文化」講座で古代史講義を担当した時から、記紀を始めとした古代史に取り組み、素人の観点から古代史研究を開始し、現在まで16年間、16シリーズ(各5回講座)を開発し、古代史の講座を横浜市地区センターを中心に、学者ではない素人にも分かる古代史セミナーを開催し好評を得ている。今後オンラインでの全国展開を計画している。

**古代史シリーズ5「日本の神社と神々」**

**第二部「伊勢信仰と大国主(出雲)信仰の神」**

発行日 令和7年7月吉日 初版発行

著者 井上 正和

発行所 有限会社 情報戦略モデル研究所

〒226-0006 横浜市緑区白山2-2-E-216

TEL:045-934-7254

URL: <http://www.ism-research.com/>

本書は、法令の定める場合を除き、複製・複写することはできません。

●本著の読者お問い合わせは下記を参照ください。

お問い合わせ: [ism.researchbook@gmail.com](mailto:ism.researchbook@gmail.com)

ISBN 978-4-9912583-5-0  
C1021 1000E

発行:情報戦略モデル研究所  
価格:本体価格 1,000 円+税

ISM  
研

主な内容
はじめに 第1章 「伊勢神宮の神と特性」 第2章 「伊勢神宮の由来と広がり」 第3章 「大社造りと社殿の神々」 第4章 「出雲の神々と大社創建」 第5章 「出雲大社の祭祀」 おわりに